

# 小林美和の思い出



先々代小林徳雄上人内室小林美和（持法院転誉清浄三輪大姉）が亡くなつて、五十年を迎えた。寺としては昨年四月十八日の特別法要において、第五十回忌法要を済ませており、小林家としてこの十月三十日にごく内輪で五十周忌の法要を営んだ。

小林美和は明治十六年八月三十日、須坂市井上中町で羽生田新助・竹の長女として生まれた。一人娘であった。羽生田家は車（水車）屋で耕馬も一頭飼っていた。美和は幼くして父を亡くし、若いころは和裁を教え

て家計を助けていたようである。なお新助の本家にあたる井上宇土栗の羽生田伝右衛門は蚕種商で、屋敷跡には今も石の祠が残っている。

明治三十二年、縁あって小林徳雄と結婚、二男六女をもうけた。明治大正・昭和の五十七年間、住職を助

けて寺を支え、子供を育て上げ、養蚕など農作業にいそしみ、明治生まれの女性がそうであったように、一日中働いていた。また病に倒れた母を寺へ引き取り、長年世話をしていったという。

昭和三十年五月二十七日、七十五歳で死去。五月三十日檀信徒葬、翌三十一年四月十五・十六日に一周忌法要が執行された。

◇ ◇

■私が嫁いで八年半ほど一緒に暮らしていましたが、とにかく大したおばあさんでした。思い出すのは、子分のお宅へもめ事の仲裁などで、夜よく出かけていたことです。スラックとしてスタイルが良く、ふだんボロを着ていても、よそ行きの服を着ると、とても上品でした。髪の毛が細く、

白髪が目立ちませんでした。裁縫が得意で、裁ち板を使わず待ち針と物差しで着物を縫っていました。若い時は安養寺で裁縫を教えていたそうです。祝いの席などでは「ぞうきん

節」と名付けた歌を即興で作り、節を付けて披露していました。おばあさんは文学、おじいさん（小林徳雄）は数学の才があったと思います。おじいさんはふだんおばあさんに頼

つては甘え、「おみわー、おみわー」と呼び付けては用事を頼んでいました。おばあさんは娘に着物をこしらえてやりたいと鐘撞き堂の一階で蚕を飼っていました。その収入で雨桶を直すとおじいさんが言うので、せめて玉蘭の分だけでもわしにくれておくんさい、と頼んでいたこともありました。（小林静枝）

■祖母最期のとき……。その日祖母は私達兄弟三人の世話をしながら、本堂の前の石畳のそばで庭の草取りをしていました。四歳と六歳の弟と私が何をしていたのか記憶はないが、祖母の近くにはいた。幼少だった妹は、おんぶから下ろされてお座りさせられていたような気がする。

前屈みになって草を取っていた祖母が、突然、崩れたのだ。あつ。弟と私は山の畑の母へ知らせに思いっ切り走った。……そして、私が一番先に戻ったと思った。が、その時すでに父が両腕で祖母を抱えて、庫裡の方へ歩いて行くところだった。

しばらくして、隠居部屋に寝かせられていた祖母を、私は一人でそつと見に行つた。昭和三十年五月二十七日、穏やかな日であった。

私には祖母と並んで写っている写真が何枚もある。祖母が留袖を着て、私が振袖の一枚など、小学校高学年ともなると、「かわいい」と言われ

るのが嫌だった。あれから四十年以上が経つ。祖母との写真を見ても、心から可愛がってもらったんだ、大事にしてもらったんだ、そう思わせるものばかりだ。もう胸がいっぱいになって、涙ぐんでしまう。祖母は私の心の中に今もいる、これから少しずつというはずだと思つたとき、少しだけ楽になった。（小林幾代）

■祖母美和は、私が四歳半の時に亡くなった。断片的ながら、いくつか思い出が残っている。祖母が本堂前で倒れた時、姉と二人で今は霊園になつている山の畑で豆をまいていた母へ連絡に走つた。姉に離されまいと必死に走つた情景のみ記憶にあり、葬儀などは覚えていない。風呂へ井戸水を運んでいて庫裡の方にいた父にはなく、なぜ遠くの母へ知らせに行つたのかわからない。物をねだつて須坂の町でだだをこねたこと、近くのお宮のブランコのそばで何度か遊んだことなどもなつかしい。

私はいつも茶の間で祖母と一緒に寝ていた。祖母が急死して、その夜から独りで寝なければならなかった。茶の間のガラス戸に祖母の姿が写るかもしれないと思ひ込み、こわく寝付けなかったことを思い出す。

祖母が亡くなつてはや五十年。浄土からあたたかく見守っていてほしいと、ひたすら念じた。（小林覚雄）